

インドネシア 文字を持たぬ少数民族

ハンゲル採用

インドネシアは、これまで文字がなかった少数民族の言語文化の保存が目的だが、地元政府は、韓国からの投資の呼び水としても期待している。(インドネシア・東南スラウェシ州パウパウ市で、林英彰、写真も)

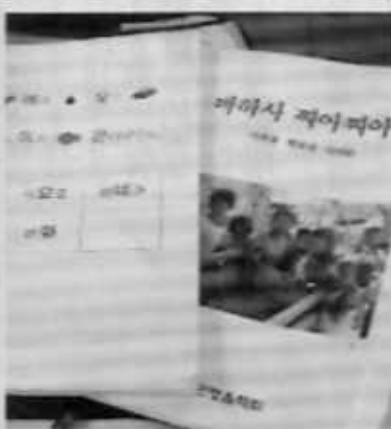
「タエバ(マンゴー)」「ホネ(砂)」

パウパウ市の山間部ソラウオリヨ地区にあるカリヤバル小学校。4年生の教室では、教師のアビティンさん(33)が紙に書いたハンゲルを見て、20人の児童らが大きな声で発音練習していた。週1回のハンゲルの授業は8月に始まったばかりだが、すでに半数以上の児童が、ハンゲルで表記された地元のチアチア語を読めるようになった。

又ルフィンさん(11)は「すごく分かりやすい。韓国語も話せるようになりたい」と目を輝かせる。ハンゲルで書かれた教科書には、簡単な読み書きのほか、チアチア族の生活や童話な

児童「分かりやすい」

ども紹介されている。地区の人口約6500人のほとんどがチアチア語話者だ。パウパウ市によると、ハンゲルの採用は、2005



ハンゲルで書かれたチアチア語の教科書

年に市内で開かれた国際文化シンポジウムがきっかけ。参加した韓国の学術関係者が、チアチア族など多くの少数民族が住む市周辺の言語文化の多様性に興味を持ち、帰国後、韓国の言語学者らの間で話が広がった。その後、ハンゲルの普及を目指す団体「訓民正音学会」の関係者が08年7月にパウパウ市を訪問し、ハンゲル採用を提案。アムル・タミム市長(55)がチアチア族の長老らと相談して採用を決め、学会と覚書を交わした。

教科書作成にも携わったアビティンさんによると、チアチア語にはアルファベットやアラビア文字では表せない音があるが、ハンゲルなら表記が可能。母音と子音の組み合わせで文字を構成する仕組みも「系統的で、学習も容易」だという。

市によると、チアチア語は主に家庭で話されているが、最近ではインドネシア語で通ずる若者が増えてきているという。現在、チアチア語の教師はアビティンさん1人で、授業は4年生2クラスだけ。市と訓民正音学会は今後、教師育成に力を入れ、チアチア語の授業も他地区に拡大したい考えだ。

パウパウ市には、ハンゲル採用を契機に韓国と経済協力を進めたい思惑もある。地元の主な産業は商業と漁業だが、職を求めて国内各地に移住する人も多い。全世帯数の約3割は、電気のない暮らしを強いられる。

「パウパウはニッケルや鉄などの天然資源も豊富」と投資を訴えるタミム市長。「まずは、チアチア族に興味を持った韓国人観光客が来てくれれば」と今後を期待している。

韓国でハンゲルを学び、